

タテ社会から見るコロナ禍の日本

医療人類学者 磯野真穂

- * 医療人類学との出会い
- * 過剰な対応と思われる実例
- * 原因は同調圧力なのか
- * 世間という視点で考える
- * リスクと責任は表裏一体
- * 政治家Sと芸能人Iの「世間」とは
- * 場の日本、資格のインド
- * 場がつながる社会の弱点
- * ヨコの連帯が重要に
- * 風通しのよい人間関係を作る方法



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

本日は、医療人類学者の磯野先生においていただきました。コロナのお話はもうそこらじゅうでいろいろお聞きだと思えますが、やはり社会状況といったようなことから、組織論的なお話とか、いろいろなそういうお話から、コロナは大変だということからもうそろそろ変わっていくべき時期に来ていると思えます。そういう意味で、今日は人類学を学ばれて、そういった研究をしてられる磯野先生においていただいたわけでございます。

磯野先生は1976年のお生まれで、早稲田大学の人間科学部をご卒業になり、オレゴン州立大学で人類学と出会ってそちらのほうへ移られたわけでございます。戻られて早稲田大学の

文学研究科で博士号を取られ、その後、国際医療福祉大学を経て、今は慶應義塾大学の研究員をされておられます。

ご存じの方もおられるかと思いますが、『ダイエット幻想』という本で前に話題になったことがございますが、今日は、少しコロナの恐怖から抜け出て、全体的な社会の中でこの問題をどう考えるかというお話をお聞きしたいと思います。

それでは磯野先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

医療人類学との出会い

磯野 初めまして。ただいまご紹介にあずかりました磯野真穂と申します。本日はお招きく